

# ジャック・ロンドン作「サンランダーズ（太陽の国の奴ら）」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大矢, 健 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/18709">http://hdl.handle.net/10291/18709</a>

## ジャック・ロンドン作「サンランダーズ（太陽の国の奴ら）」

大矢 健 訳

マンデル(家住)は北極海の端にある名もなき村だった。大きな村ではない。住人たちは平和を愛している。近隣のどの部族よりも平和を愛している。マンデルの村に男は少なく、女は多かった。そういったわけで一夫多妻制が必要となり、それが健康に営まれていた。女たちは、必死になって子どもを産んだ。男の子が産まれようものなら、それは賞賛をもって迎えられる。ここにアープ・ワークなる男がいる。彼の頭はいつも片方の肩に載っている。それはまるで首が頭を支えるという本来の業務に疲れ、あるとき、この仕事はもうしないからねと宣言してしまったかのようだった。

これらすべての原因、つまり村人たちの平和愛好、一夫多妻制、アープ・ワークの疲れた首の原因を知るには、時をさかのぼること数十年、マンデル湾にスクーナー船サーチ号が碇いかりを下ろした頃にまで戻らねばならぬ。またそれは、部族の酋長タイイーが一夜にしてお金持ちになる方法を思いついた時にまで、さかのぼらねばならぬ。今日にいたるまで、この顛末は、マンデルの人びとによって忘れられたことなど一度としてなく、それが語られるときには、皆が息を殺して耳を傾けたものであった。ちなみにこの村人たちは、彼らの西側に住む「腹べこ族」(ハングリー・フォーク)とはいとこの関係である。ともかく、この話がされるとき、子どもたちはお互いに身を寄せあって話に聞き入る。ご先

祖さまたちがサンランダーズ(太陽人)の怒りを買わず、悲惨な結末を迎えたりしていなかったとしたら、まだ生き続けてくれていたのにも思い、と同時に、彼らの馬鹿さ加減に対しては、子どもたちも訳知り顔にほくそ笑むのだった。

サーチ号から六人の男たちが岸にたどり着いたところから、話は始まる。まるでここに住むつもりであるかのような重装備で、彼らはニーガーのイグルー(小屋)に居を構えた。白人たちが宿泊の代金として小麦と砂糖をじゅうぶんにくれなかったというわけではないのだが、ニーガーは大いに悲しんでいた。というのも、娘のメサーチーが運命を白人たちに預けることにして、ビル・マン<sup>(家注)</sup>という白人のリーダーに、ご飯と毛布、つまり生活を頼ることにしたからだ。

「あの娘には、それなりの値段がつくだろうと思ってたんだ」と、六人の白人が眠りに落ちたころ、焚き火を囲む寄り合いの人びとにむかってニーガーは不満をもらした。「それなりの値段がつくはずだったんだ。だって、男たちの数は女の数より多いだろう。だから既にけっこうの値がついていたんだよ。狩人のオウネックなんか、新品のカヤックと、腹べこ族と交換で手に入れた拳銃をくれるって言ってたんだ。これがあいつの交換条件だったんだ。なのに、見てくれよ、今や娘はおらず、俺の手には何も残らないことになっちまったんだ」

「俺だって、メサーチーの値づけには加わったんだよ」とある声。そこに面白がっている気配がないというわけでもない。ピーロが、頬の広い嬉しそうな顔を光のなかに一瞬突き出していた。

「確かに。お前も値づけをした」と、ニーガーが認める。「値づけをした男は、ほかにもおったよ。しかし、なぜサンランダーの連中は、ああも落ち着きがないのだろうか?」と、不満そうに彼は続ける。「なぜ自分たちの場所に留まっておれんのか? スノーピープル(雪人)は、サンランダーズの土地を放浪したりはせぬ」

「そもそもなぜ俺たちの土地にやって来た? こう問うたほうがよい」と、暗闇のなかから声がする。そして、今度はアーブ・ワークが人をかき分け、前に出てきた。

「そのとおりだ。なぜ俺たちの土地に来る？」と叫ぶ声、多数。ここでアープ・ワークが、皆をなだめるよう静粛を求めて手をかざす。

「あいつらが地面を掘るのに、目的がないというわけではない」と、アープ・ワークは話を始めた。「たとえばホエールピープル（鯨人）のことを、わしは思い出す。彼らもサンランダーズとそっくりだった。水の中、彼らは船を失った。皆も覚えておろう。壊れかけたボートに乗って我らのところへやってきたホエールピープルのことを。彼らは、冬が来て雪が大地を覆うと、犬とソリで南のほうへ帰っていった。皆も覚えておろう。冬を待つあいだ、彼らの一人が地面を掘り、ついで二人、三人と地面を掘る者がでて、やがて彼ら全員が異様に興奮して、なりふり構わず地面を掘りはじめたのを。地面から彼らが何を掘り出したのか、我々は知らない。見られないように、奴らが我らを追っ払ったからだ。あとになって、彼らがいなくなつてから、我々はそこに行つてみた。何も見つけはしなかった。しかし大地は広い、だから、彼らがすべての場所を掘り返せたわけではない」

「そのとおり。そのとおりだ、アープ・ワーク」と、人びとは賞賛の声をあげる。

「というわけで、こう思うんだ。一人のサンランダーが別のサンランダーに伝える。それを聞いたサンランダーたちが、地面を掘りに来る」と、アープ・ワークが結論を述べた。

「でもなんで、ビル・マンは俺たちの言葉を話すんだ？」と、背が低く皺だらけの狩人が訊く。「俺たちに会ったこともないビル・マンが、なぜ俺たちの言葉を？」

「ビル・マンは前にスノーランド（雪の土地）にいたことがあるんだ」と、アープ・ワークが答える。「そうでなければ、ベアーピープル（熊人）の言葉を話せるわけがない。彼らの言葉は、腹ぺこ族の言葉にも、マンデル人の言葉にも似ている。腹ぺこ族の村にはほとんどサンランダーはおらんが、ベアーピープルの村にはたくさんいる。ホエールピー

ブルと今ニーガーのイグルーで寝泊りしている連中をのぞけば、マンデルには一人もいないがね」

「奴らの砂糖は美味いからなあ。そして小麦も上等で」と、ニーガーがコメントする。

「奴らの財産はすごいものだよ」と、オウネンクがつけ加える。「昨日、奴らの船のところへ行ったよ。巧く作られた鉄製の道具、ナイフ、銃、小麦、砂糖、それから見たこともない食べ物が数え切れないくらいあった」

「まったくそのとおりなのだ、兄弟たちよ」と言いながら、タイイーが立ち上がる。皆が向ける敬意に満ちた無言のままに、内心わくわくしていた。「サンランダーズは金持ちだ。と同時に、馬鹿なのだ。だって見てもみる。大胆きわまりない奴らなのに何も見えてなくて、自分たちの富について考えもしない。たった今だって、いびきをかいて寝ている。いっぽう我々は数も多く、奴らを恐れたりはしない」

「奴らもまた、恐れを知らない連中かもしれないぞ。立派な戦士たちだからな」と、背の低い黧だらけの狩人が反論した。

タイイーは狩人を見つめ、しかめっ面を向けた。「それは事実ではないだろう。彼らは、太陽の道の下の方の土地で生きてきた。そして、彼らの犬が柔らかいと同じように、彼らも柔らかい。やわなのだ。ホエルピープルが連れてきた犬を覚えているか。二日目には、俺たちの犬があつた犬を食ってしまったよ。柔らかくて戦うことを知らなかったからだ。サンランドでは太陽が暖かく、生活がたやすいのだ。男たちは女のように、女たちは子どものようなのだ」

賛意の頭が上下に動く。女衆は、聞き耳を立て首を長く伸ばした。

「奴ら、女には優しいらしいよ。それで女は仕事をしなくていいんだ」と、リキータがくすくす笑いながら言う。大きなお尻の健康的な女で、酋長タイイーの娘である。

「お前もメサーチーの真似をしようというのだな、そうなんだな」といって、タイイーは怒りだした。が、部族の者

たちのほうへすぐ向き直った。「兄弟たちよ、見よ、これが奴らサンランダーズのやり方なのだ。女に目をつける、そして一人また一人と連れ去っていく。メサーチーは行ってしまった。ニーガーはもらうべき代金をごまかされた。それと同じく、リキータも行ってしまうことになる。そしてどの女も行ってしまうことになる。我々は何もかも奪われてしまうことになるのだ。ペアーピーブルの狩人と話をしたことがある。だから分かっている。そこに腹べこ族の連中がおろう。俺の言うことが本当か嘘か訊いてみよ」

腹べこ族の六人の狩人は、それは本当だと言い、周りの者たちにサンランダーズの性格や振る舞い方について語りだした。これから嫁を探さねばならない若者たちが、不満の声をあげた。娘を嫁に出していくらか儲けようと思っていた老人たちからも、低音のうなり声があがり、それがより高音になり、よりはっきりした声になった。

「奴らはとても豊かで、巧く作られた鉄製の道具、ナイフ、銃を数かぎりなく持っている」と、タイイーがずる賢い提案をした。一夜にしてお金持ちになる彼の計画が、かたちになり始めていたのである。

「ビル・マンの銃を俺のものにしてやる」と、唐突にアープ・ワークが宣言した。

「だめだ、その銃は俺のものだ」とニーガーが叫ぶ。「メサーチーの代金のことを思い出してもらいたい」

「静粛に、兄弟たち」タイイーが腕を伸ばして皆を制した。「女たちと子どもたちには、イグルーに帰ってもらうこととしよう。これは男の話だ。話を聞くのは男たちだけにしようではないか」

女衆がしぶしぶ引き下がると、「皆一人ひとりに行き渡るだけの十分な銃がある」とタイイーは言う。「小麦や砂糖、それ以外の物品のことを考慮しないとしても、一人あたり二丁の銃があることを、わしは疑わない。やり方は簡単だ。ニーガーのイグルーで寝ている六人のサンランダーたちを、今夜殺してしまえばいい。明日になったら、友好をよそおって交易をしに船に向かうのだ。そしてうまいタイミングになったら、彼らの兄弟も皆殺しにしてしまう。明日の夜は、

宴とお楽しみと富の分配だ。いちばん貧乏な者でさえ、それまで金持ちだった者より多くの物を手にすることとなる。わしが言ったことは、賢きやり方ではないか？ そうではないか、兄弟たち」

低音の賛意の音が響いた。そして攻撃の準備が整えられた。腹ぺこ族の六人は、豊かな部族に似つかわしくライフルで武装し、弾薬もたんまりあたえられた。しかしマンデル人に拳銃があたえられることは稀で、配られた拳銃も大半が壊れていた。また全体に、玉も火薬も足りなかった。しかしながら、この軍需品の欠乏は、骨矢尻の弓矢と近距離から放つ投げ矢で埋め合わされた。接近戦のためには、ロシヤ製・合衆国製の金属性ナイフが用意されていた。

「音を立ててはいかんぞ」とタイイーは最後の命令を下す。「イグルーの回りをすぐ近くから完全に包囲するんだ。サランダーたちが逃げ出せないようにな。そうしておいて、ニーガー、お前が六人の若者を引き連れて、奴らが眠っているところに忍び込む。予期せぬときに暴発しがちな拳銃は使うな。力を込めてナイフで殺るんだ」

「メサーチーには、危害がおよばぬようにしてくれよ。娘には値がつくんだからな」と、しゃがれ声でニーガーが囁いた。

地面にびったりと腹をつけ、この小さな部隊はイグルーに神経を集中させた。後方には、大いなる期待をもって、腰を下ろした女たち、子どもたちが控えていた。殺戮の場面を一目見ようと集まっていたのだ。夜が短い夏の終わりを告げようとしていた。朝もやの中にぼんやりと浮かんでいたのは、匍匐前進するニーガーと若者たちだった。手と膝を地面につけ、立ち止まることなく彼らはイグルーの長い入り口通路に入り、姿を消した。タイイーは立ち上がって、満足の表情を浮かべた。すべて順調だった。大きな円形をなしてイグルーを取り囲んでいた頭が次々に持ち上がる。待っていたのだ。村人それぞれが、その人の性格にしたがって「その場面」を想像していた。眠っている男たち、刺される何本ものナイフ、暗闇での非業の死。

大声で発せられた挨拶の言葉。サンランダーの声だ。これが沈黙を打ち破った。そして銃声。イグルーの中が騒然となる。何の考えもなく、円形になった村人たちが入り口通路に入っていた。小屋の中で、ライフルの銃声が六発ほど鳴った。狭い通路に押し込められた村人たちは無力だった。先頭にいた者たちは目の前で発砲される銃から必死に後退しようとし、最後尾にいた者たちは戦闘の場面にむけて必死に前へと急いだ。大口径の四五―九〇シャープス銃から発せられた複数の銃弾は、一撃で六人ほどの男たちの体に穴を開けた。男たちが押し合いへし合いをしながらも動けなかったから、通路は修羅場と化した。人の塊にむかって、狙いもつけずに銃は撃ち続けられた。まるでマシンガンに撃たれたように、村人たちは散っていった。このように次から次へと男たちが死んでいったものだから、前に進める者はなかった。

「こんなの見たことないぜ」と、腹ぺこ族の一人があえぎ声をあげた。「ちょっと中を覗いただけなのに、まるで屠殺のあとのアザラシみたいに、死体が山になっている」

「もしかしたら、奴らも戦士なのかもしれんと言わなかったかな」と、背の低い皺だらけの狩人がかん高い声で笑う。「これは想定されるべきであつたらう」と、アーブ・ワークが強気に言った。「自分たちで仕掛けた罠にはまっているようなものだからな」

「馬鹿どもめが！」と、タイイーが叱る。「しょうもない馬鹿どもだ。お前らがやっていることなんか、計画に入っていないぞ。ニーガーと六人の男たちだけが中に入るようになっておつたらう。わしの知恵はサンランダーズの知恵に勝つておるのじゃ。ところが、貴様らは、わしの知恵の鋭き刃を鈍らせてしまったのだ。力にならんじゃないか。これでは、知恵がないのと同じだろう！」

答える者は、なかった。皆の目はイグルーに釘づけになっていたのだ。イグルーは、清んだ北西の空を背景にぼんや



りと巨大に映っていた。屋根の穴からはライフルからの煙が、脈拍なき大気の中へと弧をえがきなら立ち上っていた。そして、灰色の光景のなか傷つき嗚咽をあげる男たちが、一人また一人と這い出してきていた。

「近くの者に、ニーガーと六人がどうなったか知らせよう伝えよ」と、タイイーが命令をくだす。

しばらくすると、回答が返ってきた。「ニーガーと六人はいない」と。

「それにもっと沢山の連中もいないよ!」と、後ろのほうの女が嘆き声をあげた。

「残った者に、それだけ余計に分け前が届くということじゃないか」。タイイーは無慈悲にこういって自らを慰めた。それから、アープ・ワークのほうに振り向くと命じた。「お前が行け。油を詰めたアザラシの皮袋を、なるたけたくさん集める。狩人たちに、それをイグルーの外板と通路のところらにぶちまけさせる。そして火をつけるんだ。サンランダーたちが、イグルーに銃口のための穴を作る前にな」

この命令が発せられるかいなかのうちに、イグルーの丸太のあいだの泥の部分に穴が開き、ライフルの銃口が顔を見せた。腹べこ族の一人が片手を横腹にあてたまま宙に舞った。二発目が肺を撃ち抜き、彼を地面に戻してあげた。タイイーもほかの連中も、射程の外に出ようと左右に散った。それでもアープ・ワークは、油袋をもった男たちを前に進める。今やイグルーのどの壁にも現れていた銃口を避けながら、マンデル川が南の森の土地から運んできた乾いた流木に、彼らは油をかけた。オウネンクが燃える松明たいまきをもって前に出る。炎が上がった。何の動きもないまま数分が過ぎた。広がる炎の前に、村人たちは武器を構える。

乾燥した家が音をたてて燃え上がると、タイイーは嬉しそうに手を合わせる。「とうとう奴らを追いつめたぞ、兄弟たちよ! 罠に嵌めてやったのだ」

「俺にビル・マンの銃をもらう権利があることを否定できる者は、もういまい」と、アープ・ワークが宣言する。

「ビル・マンをのぞいてね」と、年とった狩人が金切り声をあげる。「ほら見てみる！ そのビル・マンが来たぞ！」  
焦げて黒くなった毛布をかぶった大きな体をした白人が、炎に包まれた入り口から姿を現した。そして、その後ろから、同じようにして身を守るメサーチー、そして五人のサンランダーたち。腹べこ族の男たちが的外れに発砲し、マンデルの男たちも弓矢と投げ槍を雨あられと降らせて、彼らの動きを止めようとする。ところが、サンランダーたちは燃える毛布をかなぐり捨てて走った。肩に弾薬の小さな包みを持っているが見える。すべての財産のなかで、彼らは弾薬を選んだのだ。迅速に、そして確固たる意志をもって、彼らは走った。円形に取り囲む敵の隙間について、大きな崖めがけて真っ直ぐに走った。村の後方半マイルのところまで、夜明けの明るい日差しを浴びながらも黒くそびえる崖のほうへ。

けれど、タイイーが地面に膝をつき、ライフルの照準をいちばん最後を走っていたサンランダーに合わせる。彼が引き金を引いたときには大歓声があがり、男は前方に倒れこんだ。彼は何か立ち上がるうとしたが、ふたたび倒れてしまった。降り注ぐ弓矢をもとめせず、別のサンランダーの一人が戻ってきた。倒れた男の上に屈みこむと、彼を肩に乗せた。投げ槍をもったマンデルの男たちが近づき彼らを取り囲む。槍の一撃が男を貫いた。男は大声をあげ、背負っていた男が彼を地面におろすと、跛行ぎみに数歩進んで倒れた。いっぽうビル・マンと残りの三人は態勢を立て直し、迫ってくる槍部隊に対して鉛の雨を降らせる。五番目のサンランダーは槍に倒れた男を見下ろし、そして心臓を調べた。そして、何事もなかったかのようにバックバックの紐を切ると、男のふんだった弾薬と銃をもって立ち上がった。

「あいつは馬鹿野郎だろう」とタイイーは大声をあげ、高々と飛び上がった。前に進みながら、身をよじる腹べこ族の男の体をかわしていた。

タイイー自身のライフルは壊れていて、使い物にならない。それでその四人目のサンランダーを仕留めてくれる誰か

を探していたのだ。そのサンランダーのほうは、踵をかえし仲間の援護射撃に守られながら安全なところへと向かおうとしているところだった。背の低い年とった狩人が投射器に槍をかけていた。走りながら槍を引く手をぐいと後ろに引っ張り、槍を放つ。

「狼族のお体にかけて言うが、素晴らしい一撃じゃ」とタイイーが褒めちぎった。逃げる男が頭を前に突き出した恰好のまま、槍に刺されていた。槍はゆっくりと前後に揺れた。

背の低い皺だらけの老人は咳をして座り込んだ。一筋の血潮が彼の唇を染めたかと思いきや、それがどくどくと流れ出た。もう一度、彼は咳をする。息をするたびに、奇妙な口笛に似た音がした。

「奴らも恐れをしらぬ戦士だ」と、彼のかすれ声。意味もなく腕を突き出して見よ。「見よ。ビル・マンが来る」

タイイーは視線を上げる。四人のマンデル人と腹べこ族の一人が倒れた男に襲いかかり、槍を膝のあたりに貫通させていた。瞬く瞬間、タイイーの目には、四人がサンランダーたちの銃撃にやられるのが映った。五人目はまだ傷を負っておらず、二丁のライフルを手にしていた。逃げ出そうと立ち上がったところで、彼も腕を銃弾に撃たれ、その衝撃でほとんど一回転していた。二発目の銃弾で落ち着いたかに見えたが、三発目で完全に転倒した。すぐさまビル・マンがその場にやってきて、バックパックの紐を切ると二丁のライフルを拾いあげた。

タイイーには、これも、自分の仲間たちが前進しながら倒れてゆくのも見えていた。すぐさま不安が頭をよぎったが、まだそのままその場に留まりもって見てやろうと決意した。説明はつかないが、何がしかの理由で、メサーチーはビル・マンのところへ走っていた。が、彼のもとに到着する前に、ピーロが走り出て彼女の体に手を回した。彼はメサーチーを肩に乗せようとしていたが、彼女のほうは彼に掴みかかった。ピーロの顔を引っ掻きまくっていた。彼女が足を引っ掛け、二人は地面にドスンと倒れた。立ち上がると、ピーロは手を動かして片腕を彼女の顎の下に持っていった。手首

のあたりがメサーチーの喉を押さえ、彼女は息ができない。顔を彼女の胸にうずめ、彼女の腕による反撃は厚い髪の毛で受けている。そしてゆっくりと地面から彼女を起き上がらせる。倒れた仲間の武器を取りもどし生き残った仲間と合流しようとしていたビル・マンが、二人のところへやって来たのはこの時のことだった。メサーチーは彼の姿をみると、ピーロの体の向きを変えてそのまま動けないようにする。ビル・マンは右手のライフルを大きく振り、ほとんど歩幅を変えることすらなく、一撃をおみまいた。まるで流れ星に撃たれたかのようにピーロが地面に崩れ落ちてゆくのをタイイーは見た。そして、そのサンランダーとニーガーの娘は並んでその場を離れていった。

腹べこ族の一人に引き連れられてマンデル人の一群が突撃を試みたが、焼き焦がすような銃弾の前に大地の土くれに帰っていっただけだった。

タイイーは息を飲み呟いた。「朝日のなかのできたばかりの霜柱のようだ」

「言ったではないか。奴らは偉大なる戦士たちなのだ」と、年とった狩人が、力なく囁いた。出血多量で意識も薄れていたのだ。「わしは知っておるのじゃ。こう耳にしたことがある。奴らが海の泥棒でアザラシの漁師なのだ。奴らの銃さばきは俊敏にして正確。その理由は、それが彼らの生き方であり、彼らの手先がする仕事だからだ」

「朝日のなかのできたばかりの霜柱のようだ」と、タイイーは繰り返していた。死にかけの村人の後ろに隠れて屈み安全を確保し、ときどき辺りを窺っている。

すでにそれは戦闘ではなくなっていた。もうマンデル人で前進しようとする者はなかった。でもサンランダーたちに近づきすぎていて、引き返すわけにもいかない。三人の男が、兎のように四方にむけて小走りに退却を試みていた。けれど、一人は足をやられて倒れ、もう一人は胴を撃ち抜かれ、三人目だけが体をくねらせ左右に揺れながらどうにかうにか村の端にたどり着いていた。こういったわけで、村人たちは窪んだ場所に屈みこみ、開けた場所では地面に穴を

掘って、そこにもぐり込んでいた。その間も、サンランダーたちの銃弾がその平地を敵を求めて飛び交っていた。

「動くでない」とタイイーが懇願する。アープ・ワークが毛虫のように体をくねらせ近づいてきたからだ。「いい子だから、動かんでくれ、アープ・ワーク。そうでないと、お前が死を運んでくることになる」

「死は多くの者のうえにある」と言って、アープ・ワークは笑った。「それがゆえに、そなたが言うように、そのぶん余計に分け前が多くなるというものだろう。私の父はあそここの岩のかけで短くはやり息をしている。その向こうには、もつれた紐の塊のように身をよじる兄がいる。が、彼らの分け前も私の分け前となる。だからいいんだ」

「そのとおりだ、アープ・ワーク。わしが言ったとおりなのだ。それでも分け前を配る前に、分け前の品を手に入れないならぬ。それに、サンランダーたちはまだ死んでおらん」

一発の銃弾が目の前の岩から発せられた。そして金切り声で歌を歌うように、二発目が頭のすぐ上をかすめた。タイイーは縮こまり震えた。けれどアープ・ワークのほうはにやりと笑い、無駄と分かっているながらも目で銃弾を追った。

「あまりに速くて目では見えないか」と彼は感想を述べた。

「だが、我々の多くの者があれで死んでいる」と、タイイーが続ける。

「同時に、多くの者もまだ生きている」がアープ・ワークの返答だ。「彼らは地面に張りつくように寝そべっている。というのも、彼らも戦闘の仕方を覚えたからだ。そして、彼らは怒ってもある。さらに、我々が船のサンランダーたちを仕留めたときには、陸には四人だけだ。これには時間がかかるかもしれないが、それでもやがて、結局のところ、そのようになる」

「こっちにもあっちにも進めないとなったら、我々はどうやって船のところまでたどり着くのかな？」と、タイイーが質問した。

「ビル・マンと彼の仲間たちが陣取っているのは、彼らには都合の悪い場所だ」と、アーブ・ワークは説明した。「我々があらゆる方向から攻撃できるからだ。奴らには都合が悪い。だから、彼らは背に崖がくるようにするはずだ。そして、船からの援軍が駆けつけてくれるのを待つだろう」

「船から仲間たちを来させてはならん。これは命令じゃ」

タイイーはふたたび勇気を取り戻していた。崖のほうに退却するという予言どおりの行動をサンランダーたちがとると、いままでないほど彼は陽気になった。

「仲間が三人しか残ってませんよ」と、相談に集まった腹ぺこ族の一人が不満を述べた。

「それでは、二丁ではなく、各人四丁の銃を持ってばよい」というのが、タイイーの返答だった。

「いい戦いぶりだったでしょう？」

「そのとおり。万が一残ったのが二人になったら、一人六丁の銃を持ってよし。だから必死に戦いなさい」

「もし一人も残らなかつたら？」と、ずる賢そうにアーブ・ワークが囁く。

「そうになったら、そなたとわしで、全部銃をもらうのさ」とタイイーが囁き返した。

しかしながら、腹ぺこ族のご機嫌をとろうと、彼らの一人をタイイーは船攻撃隊のリーダーに任命した。攻撃隊は部族の三分の二の戦士たちから成っていた。毛皮などの交易用の品々を携え、十二マイル先の海岸線へと彼らは向かった。残った者たちは、ビル・マンと仲間のサンランダーたちが築きはじめた砦を半円形に取り囲むかたちで配置された。タイイーは物の利点を悟るのにはやい男である。だから、浅い塹壕を掘るよう部下たちにすぐさま命令した。

「奴らが気づくには時間がかかろう」と、タイイーはアーブ・ワークに説明する。「忙しい状態しておけば、目の前の死体のことに気を取られすぎまい。問題も起こさない。そして夜のあいだにだな、我々は砦に近づくんぞ。サンラン

ダーたちが朝日のなか覗いてきたときには、我々はぐっと近くに行っているわけだ」

昼間の暑さのなか、兵士たちは仕事の手を休めた。女衆が運んできた魚の干物とアザラシの油で食事をとることにした。ニーガーのイグルーの中にあつたサンランダーたちの食糧を所望する者もあつたが、船攻撃隊が戻るまではいかんと、タイイーはサンランダーズの物の分配を禁止した。攻撃隊の結果についての想像が囁かれていたさなか、海のほうから内陸まで届く鈍い爆発音が響いてきた。目の良い者たちは、すぐ消えたけれど黒い煙が上がつたと云つた。サンランダーたちの船のすぐ上で煙が見えたと彼らは断言した。タイイーは大砲の煙ではないかとの意見だつた。アープ・ワークにはそれが何だか分からなかつたが、何がしかの合図なのではないかと考えた。いずれにせよ、何かが起こつていい頃だ、と彼は言つた。

五時間か六時間ののち、海のほうから広い低地をとおつて一人の男がやって来るのが認められた。女たち、子どもたちが彼を迎えようとわつと走つた。着るものも着ておらず息を切らし、傷を負つたオウネンクだつた。額の傷からは血が流れ、それが顔を汚していた。左腕は恐いぐらいにへし曲り、肩からだらりとぶら下がっている。しかしもつとも特筆すべきは、彼の目に浮かんでいた凶暴な輝きだつた。女衆には、それが何を意味しているのか分からなかつた。

「ペシヤックはどこだい？」と、老婆が厳しく問い詰めた。

「オリトリーは？」「ボラックは？」「そしてマークックは？」と、老婆の声に続き次々と声があがる。

だが、彼は何も答えない。ただうるさい連中をわきにどけながら、よろめきながらもタイイーにむかつて歩を進めてゆく。その老婆が嘆き声をあげると、一人また一人と女たちが加わつた。彼のあとについて行く。男たちも塹壕から這い出すとタイイーのほうへと走り寄つた。自分たちで作つたバリケードに登り、何が起こるのだろうかと見ていたサンランダーもいた。

オウネックは立ち止まり、目に入る血潮をぬぐい、辺りを見回した。何か言おうとしているのだが、乾いた唇は糊をつけられたみたいに動かない。リキータが彼に水を運んできてやった。うなずき、ごくりと飲み干した。

「戦闘になったのだな？」と、とうとうタイイーが質問する。「良き戦<sup>いくま</sup>であったのだな？」

「ハハハ」と突然、そして激しくオウネックが笑いだしたのだから、みな黙ってしまふ。「あんな戦いは見たこともない！ これまで獣とヒトの戦いをしてきた俺、オウネックはそう言う。そして忘れてしまふ前に、これは言っておこう。重く知恵のつまった言葉だ。戦うことによって、サンランダーたちはマンデル人に戦争の仕方というものを教えてくれた。長く戦えば、我々はそれだけ賢い戦士になるであらう。たとえサンランダーたちが、あるいは我々が、みな死んでしまふことになるとしても。ハハハ。あれは見事な戦<sup>いくま</sup>だったよ」

「あなたの兄弟たちはどこか？」タイイーは、オウネックが痛くて悲鳴をあげるまで体を揺さぶる。

オウネックが平常心を取り戻した。「わが兄弟たちか？ もういないよ」

「ボメ・リーは？」腹べこ族の一人が叫ぶ。「ボメ・リー、つまり我が母の息子は？」

「ボメ・リーも死んだ」と、単調な答えがオウネックから返ってくる。

「サンランダーたちはどうなった？」とアープ・ワーク。

「サンランダーたちも、もういない」

「じゃあ、サンランダーたちの船は？ 富と銃とその他の物品は？」と、タイイーが訊く。

「サンランダーたちの船も富も銃もその他の物品も、もうない」というのが、変わらぬ答えだった。

「すべてのものがなくなった。空<sup>くら</sup>があるだけさ。俺だけが存在している」

「それでは、お前は馬鹿野郎だ」



「そうかもしれない」と、何も感じていないかのようにオウネンクは答える。「俺は、自分を馬鹿野郎にしてくれたものを見ただけなのかもしれない」

タイイーは黙っていた。皆も待っていた。オウネンクが自分の好きなやり方で顛末を話してくれるのを待っていた。

「タイイーよ、我々は銃を使わなかったのだ」と、ようやくオウネンクが話を始めた。「銃ではなく、ナイフを使った、兄弟たちよ。そして、狩り用の弓矢と槍を使った。二人組、あるいは三人組になってカヤックに乗り込み、我々は船に近寄っていった。俺たちの姿を見たサンランダーたちは喜んでくれたよ。我々は皮を広げ、彼らも交易用の物品を持ってきた。すべて順調だった。ポメ・リーは待っていた。お天道様が真上にきて奴らが食事のため座り込むまで待っていた。そしてその時がきたとき彼は大声をあげ、我々は奴らに襲いかかったんだ。あんな戦はいままでなかったし、あんな戦士たちもいままでなかった。我々のふい撃ちでサンランダーたちの半分は死んだが、生き残った半分は悪魔みたいに戦った。そして分身の術を使ったように彼らは増えたんだ。どこに行っても、奴らは悪魔みたいな戦い方をしたよ。三人はマストを背にしていた。我々は仲間の屍で奴らを丸く囲みこんだ。とうとう奴らも死んでいったね。銃を持ってきた奴らもいた。両目を開けたまま撃ちまくりやがった。それも俊敏に正確に。一人は大きな銃を持ってきた。一度に何発も弾が出てくるやつだ。これを見てみてくれよ」

オウネンクは、自分の耳を指さした。大粒散弾でほとんど引きちぎられていた。

「それでも、俺が、オウネンク様が奴の後ろから槍を突き通してやったんだ。そんな風にして、あれやこれやのやり方で、俺たちは奴らを全員殺してやったんだ。頭の男をのぞいてね。そして、我々は頭を取り囲んだ。こちらは多数で、あちらは一人だ。そうしたら、奴は雄叫びをあげたかと思うと、我々にあいだをすり抜けて、俺たちの五人か六人を引きずったまま船の中へ走っていったんだ。もう仕留められると思った。頭の男が下に一人だけだったんだから。す

ると、この世の銃が全部一緒に爆発したみたいな大音響さ。すげえ音だった。そして、鳥みたいに俺は空を飛んだ。生きていたマンデル人も、死んだサンランダーたちも。小さなカヤック、大きな船、銃、そして富。全部が宙に飛んでいったのさ。だからこの話をした俺は、こう言う。残ったのは、オウネンク様ただ一人だよね」

集まっていた者たちのうえに沈黙が積もっていた。タイイーは、アープ・ワークを驚異に打たれたかのような視線で見つめていた。しかし言葉をかけようとはしなかった。女たちもまた、驚きのあまり亡くなった者たちを嘆くことさえ忘れていた。

オウネンクは胸を張って刃りを見回した。「俺だけが残った」彼は繰り返した。

ところがこのとき、パンツと音が鳴り、ビル・マンのバリケードからライフルの弾が飛んできた。オウネンクの胸のところ、ヒュッというような、ズブツというような音がした。彼の体は後ろに倒れかけたかと思うと、前に戻ってきた。顔は驚愕の表情だ。息をつまらせながらも、口元には不敵な微笑を浮かべている。両肩が縮み膝が曲がる。溺れそうな人がそうするように身震いしたあと、彼は背筋を伸ばそうとした。しかし肩の縮みと膝の曲りがふたたび起こる。そして彼はゆっくりと沈んでいった。本当にゆっくりと。こうしてオウネンクは、地面に倒れ落ちていった。

サンランダーたちが身を潜めていたほら穴からここまで、ゆうに一マイルはある。死はこの距離を越えて飛んできたのだ。怒りの雄叫びがあがった。血に飢えた復讐の決意、獣の理性を超えた凶暴さがそこにはあった。タイイーとアープ・ワークはマンデルの人びとを抑えようとしたが、押しつけられてしまう。二人はただ振り返り、狂気に駆られて人びとが突撃してゆくのを目にしただけだった。ところが、サンランダーたちのもとからは、銃声が響いてこない。あいだの距離の半分のところまで行ったとき、ほら穴の沈黙に恐れをなした多くの者たちは、立ち止まり少し待ってみた。が、荒ぶる気持ちに連れられて、半分の距離のさらに半分のところまで彼らは進んだ。それでも、ほら穴に人の気配は

ない。あと二百ヤードのところに来たときにはゆっくりのペースになり、皆で身を寄せた。あと百ヤードで、二十人は訝しく思い、歩みを止め協議することにした。

と、そのとき、バリケードの上のほうに煙の帯ができ、村人たちはバラバラに投げられた小石のように四方八方に逃げまどうことになった。四人が倒れ、さらに四人倒れた。一人あるいは二人が同時に、着実に倒れ続けた。とうとう残ったのは一人きりとなった。彼は耳に死神の歌を聴きながらも必死に走っていた。それは、若き狩人ノックだった。足が長く背が高い。それまでしたことがないような走りっぷりだ。何もない平原を鳥のように彼は疾走した。横端から横端まで、飛び泳ぎくねくねと曲がりながら走った。ほら穴のライフルは、規則的な木霊を響かせていた。フラット、フラット、フラットと、ギザギザな連続音が響いていた。それでもノックは倒れては立ち上がりを繰り返していた。まだ無傷である。まるでサンランダーたちが諦めたかのように、発砲が止むときもあった。逃げるノックが描いていた曲線はだんだんと真っ直ぐになっていく。しまいには、彼は一直線に走っていた。が、歩幅を広げて走る彼を、ほら穴から発せられた一発の銃弾がとらえた。空中で腹を抱え込むかのような格好になり、丸くなってボールのようになったノックの体が地面にぶつかる。そして地面にぶつかった衝撃で、ボールのようにパウンドし、ぐちゃぐちゃの塊となって地面に落ちた。

「敏速な翼をもった鉛より速い者などあるのだろうか」と、アープ・ワークと考えていた。

タイイーは不満のうめき声をあげ、向こうをむいてしまった。この件は終了したのであり、もっと喫緊の課題が目の前にあるのである。腹べこ族の一人と四十人の戦士が（彼らの何人かは傷を負っていた）残っていたのだ。そして対処すべきサンランダーはたったの四人だ。

「我々は奴らをあの崖の横の穴に閉じ込めておく」とタイイーは言う。「そして空腹が彼らを苦しめ始めたら、子ども

のように打ち取ってやるのだ」

「でも何を求めて戦うのですか？」と、若者の一人であるオルーフが訊いた。「サンランダーたちの富はもう存在しない。残っているのは、ニーガーのイグルーにあるものだけです。大した量じゃありませんが……」

彼はすぐさま話を止めた。銃弾によって耳のすぐ横の空気が引き裂かれたからだ。

馬鹿にしたようにタイイーが笑った。「それを答えとるのがよい。死のうとせんキ印のサンランダーたちに、我々はほかに何ができるといふのか」

「そんな馬鹿な話が！」と、オルーフが抗議する。次なる銃弾の到来に耳をそば立てている。「このサンランダーの連中が戦わなくちゃいけないというのは、おかしいですよ。なぜ簡単に死んでくれないか、ですって？ 奴らは自分たちがすでに死人であると知らないのですよ。そんなほんと馬鹿な連中なんですよ。それに、俺たちのほうにも厄介がおよんでしまうんですよ」

「これまでは富を求める戦いであった。今は生命のための戦いなんじゃ」。アープ・ワークが完結なまとめをした。

その夜、藪近くでは小競り合いがあった。銃の撃ち合いがあったのである。そして朝になってみると、ニーガーのイグルーからサンランダーたちの財産がなくなっているのが分かった。彼らがその後もち出したのである。というのも、陽の光のもとには、彼らの足跡がはっきりと残っていたからだ。オルーフは崖の頂に登り、ほら穴の中へ大きな岩石を落とそうとした。しかし崖には突起部があり、それで岩石のかわりに毒舌と悪口を彼は投げ込めただけであり、しまいにはすごい苦しみをあたえてやるからなと約束しただけだった。ビル・マンは、ベア・ピープルの言葉で嘲り文句を返してきた。これを覗いてやるうと藪から頭を上げたタイイーは、肩を銃弾で撃たれ傷を負った。

それから続いたうんざりするような日々、そして藪を崖に近づけようとした苦しい夜のあいだ、サンランダーたち

をこのまま行かせてしまうのが賢いやり方なのではないかと、何回も議論が繰り返された。しかしこのやり方に、村人たちは恐怖を覚え、女たちもこの考えに悲鳴をあげた。サンランダーたちのことはもうこんなに見てきた、もう見たくないと思っていたのだ。いつでも銃弾のヒューという音、プスン・プスンという音が響いていた。いつでも死者の数は増えていった。黄金に輝く朝日のなか、かすかなライフルの発射音が遠くから聞こえてきた。女たちは、遠く離れた村の端で両手を上げて神に祈りを捧げていた。男たちは、灼熱の昼間のあいだ銃弾の高音の歌を聴き、自分の死が近いことを知った。夕暮れ時の薄闇のなかでは、瞬くたき火の横で小さな土煙が上がった。夜のあいだじゅうずっと、死者を悼む女たちの歌——ワーホーハー・ワーホーハー——という嘆きの歌である——が響いていた。

タイイーが約束したように、とうとう空腹がサンランダーたちをとらえていた。一度など、初秋の疾風のなかサンランダーの一人が暗闇のなかを這い藪を越えて、魚の干物を何匹も盗んでいった。しかし彼がそれを持ち帰ることはなかった。朝日が村の中の彼が潜んでいた場所を明らかにしてしまったからだ。そこで彼は孤独な戦いを強いられることになった。マンデル人にすっかり囲まれた彼は、リボルバーで四人を殺害した。村人たちが拷問にかけて殺してやろうとすると、彼は銃を自らに向け自死してしまった。

この事件は村全体に暗い影を落とすこととなった。オルーフが疑問をこのようなかたちにした。「もし一人のサンランダーを殺すのに、俺たちがこんなに苦勞するとすれば、残った三人を殺るのに、どれだけ大変な思いをするのだろうか？」

それからこんなこともあった。メサーチーがバリケードのそばに立ち、たまたま近くをとおるかかった三匹の犬の名を呼び、ほら穴の中に入れてしまったのだ。食糧であり生命である。これで、「最後の日」がまた先送りにされてしまった。これでマンデル人の心に絶望的な気分が入り込んできたのである。こうしてメサーチーには、数世代におよぶ呪い

が掛けられることとなった。

のろのろとした毎日が続いた。太陽は南への道を急いでいた。夜は長くなり、霜のおりる気配が漂っていた。それでも、まだサンランダーたちはほら穴を死守していた。村人たちは、終わりのなき緊張のもと心が折れそうになってきた。ここでタイイーは強く深く考える。そうして、こう命じた。村人全員の持つ毛皮や革製品を集めよ、と。彼はこれを円筒形に丸めてまとめさせた。それぞれの束の後ろには守りの男を立たせた。

命令が発せられたとき、短い昼間は終わろうとしていた。そしてこの革をきちんと丸める仕事は、単調で面倒で時間がかかる。サンランダーたちの銃弾がこの盾に対してブス、ブス、あるいはブス、ブスと音を立てた。それでも貫通するということはなかった。これが分かったとき、男たちは歓声をあげた。しかし闇夜は迫っている。そこでタイイーは自分の成功に安心して、革の盾を塹壕に戻すようにと言いつけたのだ。

朝のことである。ほら穴はこの世のものとは思われない静寂に包まれたままだった。本当の進軍が始まる。最初は大きく間をあけていたが、ほら穴を囲む半円が小さくなるにつれて、革の盾は接近していった。ほら穴まであと百ヤードの距離までくると、盾と盾のあいだはずいぶん狭くなっていった。それで、進軍停止の命令が発せられたとき、囁き声の伝言で十分だった。ほら穴には人の気配がない。村人たちはじっと注意深く見つめていた。が、動くものはない。進軍が再開され、五十ヤードのところまで来た。まだ動きも音もない。タイイーは首を横に振る。アーブ・ワークでさえ訝しく思っていた。それでも進軍再開の命令が発せられた。彼らは進軍する。ついには盾と盾が接するようになる。毛皮と革でできた城壁が、ほら穴の入り口の上から覆いかぶさり、崖と接するようになった。

タイイーは振り返ってみる。女たち、子どもたちが空になった塹壕で黒い塊となっていた。沈黙するほら穴のほうに視線を移す。戦士たちは、心配そうに身を震わせていた。彼は盾の第二列に前進するよう命じる。彼らは前進する。前

と同じように盾と盾が接するようになった。ここで、アープ・ワークが自らの判断で一人前に出た。盾がバリケードに接すると、じっと待ってみる。そのあと、ほら穴の中に石を何個か放り込んでみた。何の反応もない。とうとう、じゅうぶん気をつけながら立ち上がり、中を覗いてみることにした。目に入ったきたのは、地面を覆っていた空の葉きょう、白く光る舐めつくされた犬の骨、岩の切れ目から水が浸み出しじめじめした地面だけだった。サンランダーはいなかった。

魔女に仕業ではないかという囁きがあり、曖昧な不平があり、暗い表情があった。何か良からぬことが起こる予兆をタイイーには感じさせた。アープ・ワークが崖のふもとに続く道を進み始めると、タイイーの呼吸はいくぶん穏やかになった。

「穴がある」と、タイイーは大声になっていた。「奴らは、革の束でできた盾というわしのアイディアは予想していて、穴に逃げ込んだんだ」

この崖は、ミツバチの巣のように地下に多くの抜け道を持っていた。その一つは、ほら穴と窟塚が壁に接する中間地点の広場につながっている。あっちだ、などという多くの驚きの声とともに、部族の者たちはアープ・ワークのあとに着いていった。そして、二十フィートぐらい上方にあり、サンランダーたちが使った洞窟の入り口がはっきり見えるところへ出た。

「仕事の終わりが見えたようじゃー」と、嬉しそうに手をすり合わせながら、タイイーが言った。「宴の準備をするように村人たちに伝えよ。奴らが、サンランダーたちが罠にはまってくれたからだ。罠に嵌ってくれたのだよ。若者たちは崖を登れ。そして、洞窟の入り口を石で塞ぐんだ。ビル・マンと彼の兄弟たち、そしてメサーチーは飢えに苦しむこととなり、やがて影となり、沈黙と暗闇のなか呪いをたれながら死んでゆくことになるのだ」

安堵と歓喜の雄叫びがあがった。腹ぺこ族の最後の一人となったハウガーは、急な斜面をよじ登り、中腰の姿勢でぽっかり空いた場所の端へと移動した。彼が腰を下ろそうとしたそのとき、小さな音の発砲音があった。斜面の安定しない先端で彼は必死に斜面につかまっていようとした。そしてもう一発の発砲音。彼は力を絞り出そうとするのだが指の力は抜けていき、ドサッとタイイーの足元に落ちてきた。巨大なクラゲのようにしばらく痙攣していたが、最後には動かなくなった。

「奴らが恐れをしらぬ偉大なる戦士であるなどと、どうやってわしに知れたであろうか？」と、タイイーは皆に聞く。皆の暗い表情と曖昧な不満を思い出していたのだ。それに弁解しようとしていたのだ。

「我々は多く幸せだ」と、村人の一人が勇敢ぶって言ってみた。もう一人は、はやる気持ちで槍をなでた。

しかし皆に静まるように言ったのは、オルーフだった。「耳をすませてみよ、兄弟たち。道がもう一つあるんだ。子どもころ崖沿いの道で遊んでいて、偶然見つけたことがある。岩で隠れているけどね。ふつうそこに行く理由なんてない。だから秘密の抜け道なんだ。誰も知らなかった。とても狭い穴の道だ。腹這いになってずっと行かなくちゃいけない。そうすると洞窟にたどり着く。今晚這ってそこへ行こう。音も立てず腹這いで。そうしてサンランダーたちを背後から襲うんだ。明日になればお祝いだ。この先もう二度と、サンランダーたちと争うこともなくなる」

「もう二度と」と、疲れ切った男たちが合唱した。「もう二度とごめんだ」。タイイーもこの合唱に加わった。

その夜、胸に奥に死者たちの記憶をとどめながら、手には石と槍とナイフを握りしめながら、女たち、子どもたちは、すでに知られている洞窟の入り口に集まった。地面まで二十フィートかそこいらはあり、サンランダーたちが生きてそこを通過することはできない。村には、傷を負った男たちだけが残された。傷を負っていない者たちは全員——三十人ほどである——、オルーフに従い秘密の入り口に向かった。百フィートにわたって壊れかけた崖の道があり、そこそ



面のあいだには崩れそうな石の山がある。この石の山は手か足が少しふれただけでも崩れ落ちる。そこで道をゆけるのは、一度に一人きりだ。オルーフが先頭に立ち、自分が通りおえると次の者に来るよう伝え、当人は中へと進み姿を消した。一人、また一人と男たちは続いていった。とうとう残ったのはタイイー一人となった。彼には、最後の男が声をかけてくるのが聞こえた。が、ここで彼は急に猜疑心に捕われ、考え込んでしまう。三十分もしてからやっと入り口に近づき、中を覗き込んでみた。道がとて狭いことが実感され、目の前の暗闇が手で触れられそうな塊となった。穴の中の地面も壁もその冷たさで、彼を震えさせる。中には行けない。マンデル人の最初の死者ニーガーから腹べこ族の最後の一人ハウガーまで、死者たち全員がやってきて、彼の横に腰を下ろしていた。彼は、目の前の暗闇に潜む恐怖と対面するより、これら死者たちと一緒にいる恐怖のほうを選択した。頬に何か柔らかくて冷たいものが軽く触れるまで、彼はそこにじっと座っていた。初雪が降ってきた。ほんやりとした夜明けがやってきて、明るい陽射しが届いた。と、そのとき、道のあたりから低音で泣くように喉から発せられる声を聴いた。これが聞こえたり聞こえなかったりする。しかしそれは、だんだん近づいてきて、どんどん明瞭になってくる。タイイーは崖から一段下におり、最初の棚に足をかけた。そして待つ。

そのむせび泣きをしていた者は、それでもなかなか近づいてこない。やがて、何度も立ち止まったあと、そいつはタイイーのところへやって来た。タイイーには、それがサンランダーの立てる音ではないことが分かっていった。それで、彼は手を伸ばした。頭がこのあたりにあるはずだと思ってところで、曲がった腕の上に乗せられた肩に触ることができた。頭はのちほど見つかった。首の上にあるのではなく、折れてだらりと垂れさがり、額の部分が地面に接触した状態だった。

「タイイーなのかい？」と、その首は言った。「わしだよ、アーブ・ワークだよ。まるで乱暴に投げられた槍のように、

救いようもなくボロボロのアープ・ワークだよ。頭が地面に埋まっている。助けてくれなくちゃ、ここから下りられない」

タイイーが穴の道の中に体を入れ、アープ・ワークの背が壁に張り付いた恰好のまま彼を引きずり上げる。だが、ワークの首は胸のほうへだらりと下がったままだ。それはまだすすり泣き、嗚咽をあげている。

「アイオーオー、アイオーオー」と、アープ・ワークは泣いていた。「オルーフは忘れていたのさ。メサーチーもまた秘密の抜け道があることを知っていたということ。そして彼女はサンランダーたちに道を教えたんだ。そうでなかったら、奴らが狭い道の終わりで俺たちを待ち伏せしてるなんてことにはならなかったはずだ。というわけで、アープ・ワークは、救いようのない壊れた人間になってしまったのさ。アイオーオー、アイオーオー」

「それで、憎っくきサンランダーたちは死んだのか？ 狭い道の終わりで、奴らは死んだのか？」と、タイイーが訊く。

「奴らが待ち伏せしてるなんて、どうやって知れたらう？」と、アープ・ワークはまだ嘆いていた。「俺の前に何人も者たちが行っていったんだ。諍いが起きている音なんて、ぜんぜんしなかったんだ。諍いが起きている音がなせしなかったのか、どうやって知れよう？ しかし、気がついてみると、腕が二本、俺の首に絡みついていた。だから声も出せず、あとから来る者たちに警告をおくることもできなかった。そうしたら、もう二本腕が現れ、俺の首を掴んだ。さらに二本が足を捕えた。そんな風にして三人のサンランダーたちに押さえ込まれてしまったんだ。そして二本の腕が首を押さえたまま、足を押さえた別の二本が俺の体全体をひねりやがった。俺たちが沼地のカモにするように、奴らは俺の首をへし折りやがった。

「それでも、まだ俺は死ぬ運命ではなかったらしい」と、アープ・ワークは続ける。自尊心の残り火がまだ光を放つ

ていた。「俺だけが生き残った。オルーフと他の連中は仰向けになって一列に寝転がってるよ。顔はあっちを向いたり、こっちを向いたりしてるがね。中には顔だけ地面に向いてしまっているのもいる。身の毛もよだつ光景さ。というのも意識を取り戻したとき、サンランダーたちが残していった松明で奴ら全員の姿を見てしまったからね。俺も並べられて奴らと同じく列に入っていた」

「それで、それで？」と、愕然として言葉が出てこないタイイーが訊く。

タイイーは突然飛び上がってしまった。そして震える。ビル・マンの声が道のほうから聞こえてきたのだ。

「よかったよ」と、その声の主は言った。「ねじ曲がった首のまま這う男を探していたのさ。そしたら、どうだい、タイイーじゃないか。銃を捨てな。石に当たる音が聞こえるように、銃を捨てな」

仕方なくタイイーは命令に従う。すると、ビル・マンが腹這いのまま明るいところに姿を現した。珍しいものをみるかのように、タイイーは彼を見つめる。ビル・マンはやせ細り、疲れ、汚らしかった。そして、目は深く窪み、炭火の炭のように弱く光っていた。

「タイイー。腹がへってる」とビル・マン。「とても腹がへっている」

「わたくしはあなた様の足元に屈する土でございます」と、タイイーは答える。「あなた様のお言葉が法でございます。それにです、わたしは、あなた方に抵抗するのは良くないと仲間たちに言っておったのです。忠告したのです」

しかし、ビル・マンは背を向け道の奥にむかって声をかけていた。「チャーリー、ジム。女を連れてこい。こっちへ来るんだ」

「それでは飯にする」と、仲間とメサーチーが到着すると、ビル・マンは言った。

弁解するかのように手をすり合わせながら、タイイーが言う。「大した量もございませんが、これは皆あなた様のも

のです」

「このあと俺たちは雪の上を南に向かう」と、ビル・マンは話を続けた。

「困難なき旅路であらんことを。道が険しくありませんことを」

「長い旅路になる。犬と食糧が必要だ。それもできるだけ多く」

「選りすぐりの犬を進呈いたしますししょう。運べるだけの食糧を用意させていただきますししょう」

ビル・マンは、穴の端から滑るようにして下りてきて、出発の準備をした。「しかし、俺たちはまた戻ってくる、タ  
イイー。この地での次の滞在は長くなるからな」

こうしてビル・マンと彼の兄弟とメサーチの一向は、道なき道を抜け南に向けて出発していった。次の年になると、  
サーチ2号がマンデル湾に碇を下ろすことになった。傷を負っていたがゆえに洞窟に入らず生き残った男たちは、サン  
ランダーたちのために働くことになった。地面を掘り返すのである。狩りと漁はしなくなった。日当をもらって、それ  
で小麦と砂糖と綿布などを買うようになったのだ。それらの品々は、サーチ2号が毎年南の国から運んできた。

またこの金鉱は、極北の地のそれまでの多くの金鉱と同じく、秘密裏に掘られた。ビル・マン、ジム、チャーリーの  
三人の仲間たち以外の白人が、北極海の片隅にあるマンデルの土地の場所について知ることはなかった。アーブ・ワー  
クの頭は片方の肩に載ったままである。そして彼は信託の言葉を運ぶ者となった。若者たちに平和愛好の教えを広めて  
いたので。この仕事で彼は三人の白人から年金を受け取っていた。タイイーは採掘場の監督となった。サンランダーに  
ついて、彼は新たな理論を獲得していた。

「太陽の道の下の南の土地で生きてきた彼らは、やわではない」と、パイプをくゆらせながら、夜番の連中が休みに  
入り昼番の連中が仕事を始めるのを監督しながら、彼は言う。「太陽の光が彼らの血の中に流れ込む。そして大いなる

火によって彼らの血潮を焼く。すると、彼らは欲望と情熱に満ち溢れることとなる。その火は消えることがないから、サンランダーたちは自分たちが負けるということを知らないのだ。さらには、彼らは落ち着きというものを知らない。それは悪魔の所業ともいふべきものだ。サンランダーたちは、終わりなく働き、苦痛に耐え、戦い続けるためにこの世に生まれた。これをわしは知っておる。わしの名はタイイー」。

《訳注》

(1) マンデル (Mandel) おそらく架空の地名だろうと思われる。ロンドン作品では執筆すべきことである。直後に執筆された作品であり、多くの共通点を持ちながら、「やり直し」的要素のある「謎解きマスター」に出てくる「ダッチハーバー」や「セントメアリーズ」とは対照的である。

(2) ビル・マン (Bill Man) ビルはアメリカ人にはよくある名前であり、それに男である意味を原住民ふうにつけ加えたもの。原表記のハイフンが示すとおり、マンは姓ではないだろう。「ビル男」ではあまりにおかしいので、そのまま置くことにした。

【訳者付記】

“The Sunlanders” 短編集『氷点下の子どもたち』の五番目に収録されている作品。短編集のなかでの最長の八〇〇語。ロンソンが短編集に入れるまで使っていたタイトルは、“The Sun Folks”。作品内には類似の「族」への言及がある。Hungry Folk, Bear Folk, Mandell Folk。白人に特別の重きをあたえるためだろう。「太陽」を象徴的に用いて、総じてリアリズムよりも神話への志向が感じられる作品。

雑誌社への投稿は何度かあった(『マクルアーズ』、『エインスリーズ』、『サタデイ・イヴニング・ポスト』など——作家の自信と読むべきなのだろうか——)し、『エインスリーズ』に採用されもしたが(百ドルのオファーをロンドンは一度断っている。see Letters, p. 273)。雑誌掲載はなかった。『氷点下』の書籍出版とバッティングしたためである。

執筆は、十作品からなる短編集のうち六作がほぼまとめて書かれた時期の中間地点である、一九〇一年八月二十四日から一九〇一年九月九日の二週間のあいだになされた。一週間程度で仕上げたと思しい。なお、この六作の脱稿日は以下のとおりである。

1901/07/09 "Keesh, Son of Keesh"

1901/08/03 "Nam-Bok the Unveracious"

1901/08/23 "Li Wan, the Fair"

1901/09/09 "The Sunlanders"

1901/09/25 "The Master of Mystery"

1901/11/02 "In the Forests of the North"

この時期、作家は、シュッツェンフェスト（全米射撃連盟全国大会）関連の「イエロージャーナリズム」の記事執筆（二千語弱の記事十編を『サンフランシスコ・イグザシナー』に掲載）を七月の下旬におこなっており、社会主義に関する公演を二度おこない（九月七日と十二日）、そのうえ引越しまでしている（九月中旬）。「サンランダーズ」に感じられる多少の冗長さや荒さは、このあたりが原因だろう。

「謎解きマスター」と同じくアリュエーション列島や北極海を舞台とする。海が大きな背景としてあり、母権制（その人為的な原因がプロットを動かす）への関心、ユーモアの雰囲気、「全ての原因」として始まる謎解き物語の体裁を「マスター」と共有する（母権制自体は、いくつかのエスキモー社会に実在し、当時、極北探検者たちの興味をひいた）。戦闘場面の描写が長すぎるようにも思われるが、プロット主体の物語で、最初に物語の結果が示される。作者は冒頭に物語の展開を自らに課している。どのような物語として完結されるべきなのかを知っていたわけだ。しかし、おそらく真の狙いは違うところにあったのだろう。

「生命の掟」が西洋白人文明の影響をほとんど感じさせないとすれば、「サンランダーズ」では「極北の森」のように、作品内の白人の存在が大きい。短編集はあくまでネイティブの視点から語られる、あるいはネイティブのアクションが作品の興味の中心になっているから、この二作品はどちらかといえば異色だ。しかし、おそらくこの物語の最後の場面がロンドンのポイントである。執拗なネイティブの攻撃を打ち負かしたビル・マン率いる白人金探索者たちは、サーチ号に乗ってマンデルにふたたび戻ってくる。ビル、ジム、チャーリー（英語圏、あるいはアメリカ人としては、驚くべきほどに一般的な名前だ）。彼らの人物造形は必要最低限である。ジムとチャーリーには人物像などまったくくない。しかし彼らは「ビル、ジム、チャーリーの仲間（会社）」と呼ばれる（"no white man outside the Company, which is Bill-Man, Jim, and Charley, knows the whereabouts of Mandell"）。そう、最後に白人たちは会社組織をつくって、労働者を雇って金鉱探索掘削会社を営むことになるのである。労働者とは、もちろんネイティブたちのことである。アーブ・ワークはストライキや暴動を阻止するかわりに白人から年金をもらい、タイイーは採掘場の監督となる。村の人

びとは狩猟の生活をやめ、給料と引き換えに白人から食料を買って生活をしはじめた(これについては作品の冒頭に何もヒントがない)。本短編は資本主義と帝国主義の話だったのである。

おそらく、マンデルは実在しない。歴史的にこのような組織だったネイティブの労働者化があったらどうか？ 搾取を基礎とした組織的金鉱掘削があったらどうか？ まだ調査の途中であるので断言できないが、フランクリン・ウォーカーによるロンドンのクロンダイク生活の精密な記述にも、そのようなあったとすればロンドンが何か書き記していたであろうメモについての言及もない。社会主義に、資本主義糾弾に強く情熱的だったこの時期のロンドンだったから、書くことになった創作の物語だろう。

しかし、この短編一作をみるかぎり、ネイティブの要領の悪さばかりが、あるいはビル・マンたちの強靱さばかりが強調されているようで、後味の悪い作品であることも事実だろう。まさに『氷点下の子どもたち』という、ネイティブへのやさしい目差しをもらった作品集のなかでのみ真の意味が明らかとなる作品である。

本短編集の訳出はこれで最終回となるので、作品集としての流れに重点をおき、作品集における配置の順に概観的メモを残しておくことにする。

“In the Forest of the North”

白人主人公が白人読者へ挨拶するかのようになり、読者を極北の国へと招待するかのようになり始める。ネイティブの生活は登場人物である白人の視点から観察される。読者はネイティブの世界になじむことになる。主題はネイティブ化の不可能(白人男性)、恋愛。活劇もの。白人がネイティブになろうとし、それを断念する物語。自意識と文明的影響という意味では、「ナム・ボック」や「キーシュ」も文化的人種境界の越境を描いている。逆に白人がネイティブになる話は「リ・ウォン」(女性が主人公)と「ブークラ・ヒーン」(男性主人公)。その帰還をめぐる悲喜劇。

“The Law of Life”

一般的な人の生死の問題をシリアスに描く。同時に主人公の老年は、インディアンという人種、白人からすると「他者」をあらわす。ほとんど白人文明や帝国主義の要素はない。

“Nam-Bok, the Unveracious”

少々ユーモラスに西洋白人文明にふれたネイティブの主人公が村八分にされる。

“The Master of Mystery”

村八分のはぐれ者が、最終的に村人たちに殺される。宗教的権威についての笑劇。

“The Sunlanders”

コメディの要素を含む活劇もの。「沈黙の森」のように白人登場人物に重きがおかれる。

おそらく帝国主義・資本主義批判をふくんだ社会主義的コメンタリー。

“The Sickness of Lone Chief”

フレイム・ナラティブ。「軽さ」が特徴。語りの実験。

“Keesh, the Son of Keesh”

白人文明に影響を受けたネイティブ。シリアスで壮絶な復讐劇。

“The Death of Ligoun”

フレーム・ナラティブ。作品内人物である語り手（書き手）の存在が注目される。

“Li Wan, the Fair”

ネイティブ化した白人女性が主人公。「フークラ・ヒーン」という下書きのもと、女性

ヴァージョンとして成功した。

“The League of the Old Men”

社会主義組織の要素をもちつつ (“The League”) 秘密結社を思わせる殺人集団による

(それも老人のみの組織)、復讐の模様が描かれる。「掟」の意味に多重性があり、西洋人の「法」の場所、裁判所が舞台。滅びゆく  
ネイティブによる白人文明の糾弾で作品集は幕を落とす。

(おおや・たけし 理工学部准教授)